初等教員養成課程における授業科目「ソルフェージュ」の教育内容編成について(2)

ー兵庫教育大学の事例を基にー

新　山　眞　弓*

（平成９年12月10日）

はじめに

本論は、前々回の小論（注１）で述べた教員養成課程における授業科目「ソルフェージュ」(以下、「ソルフェージュ」とよぶ）の教育内容編成について、前回の小論（注２）に引き続き、主として、聴音演習を中心に、本学の1996年度第２学期の実践報告をふまえつつ、試論として述べるものである。

Ⅰ．１学期「ソルフェージュ」の教育内容における受講者の理解度と反省点

小論（注１）で述べた、教育内容編成にしたがって実施した１学期の「ソルフェージュ」授業および試験の結果（注２）を分析しながら、受講者の理解度を考察する（なお、ここでは、リズム・単旋律聴音は省く)。

１）各聴音演習項目の理解度

①和音聴音

書取演習以前に、聴取演習を徹底して行った。その際、個々の和音判別の前に、長・短・増・減の響きの違いの判別を実施した。そのうえで、個々の和音判別の聴取・書取演習に移行したところ、入学時に正解率半分以上の受講者が３割強から、１学期末には６割強に倍増した。

②４声体和声聴音

４声体以前に、外声部のみの２声聴音から開始し、理解度に応じ、徐々に小節数も増やし、難易度も上げ４声体に移行した。その結果、入学時に正解率半分以上の受講者が５割から、１学期末には８割に増加した（ただし、外声部のみの結果)。

③２声聴音

リズム・単旋律聴音の理解度を見ながら、２声聴音に移行した。また、問題作成については、中・高の歌唱教材を基に創作した。その結果、複旋律に移行したにもかかわらず、単旋律聴音の正解率とほぼ同理解度が得られた。

２）１学期「ソルフェージュ」の教育内容・編成の反省点とまとめ

１学期においては、「各時限の教育内容編成の試み」(注１）どおり、もしくは、それ以上のペースで授業を進めることができ、各聴音演習とも１）に記したように受講者の理解度もかなり深まってきた。しかしながら、各項目において理解度の低い受講者は全項目一致しており、もっとも理解度の高い受講者との格差はあまりに大きい。したがって、２学期の授業においては、この点にもっとも留意していきたい。

Ⅱ．２学期「ソルフェージュ」の教育内容編成の目的と方法

１）目的

Ⅰの２）で述べたように、受講者の理解度の格差は１学期間を終えてもすぐに縮まるものではない。したがって、理解度の異なる受講者のどこに焦点を合わせるかを十分把握しない限り、２学期における授業内容が１学期と重複したり、偏重になってしまう。そのため、授業の能力別時間配分を考え、教育効果を著しく低下させることなく、理解度の格差を縮めていきつつ、さらに、聴音能力を高めていきたい。

２）方法

（１）グループ分け

１学期の期末試験の結果および毎時間の受講者各々の授業理解度を加味したうえで、理解度の低い受講者Ａと比較的理解度の高い受講者Ｂの２グループに分かつ。その際、以下の理解度を基準とした。

①４声体和声聴音（外声部のみの結果）

外声部のうち、どちらか一方の声部の理解度さえ低い受講者と両声部とも理解度の高い受講者（和音聴音の理解度は４声体和声聴音の結果とほぼ一致していた)。

②２声聴音

Sop.の理解度さえ低い受講者と両声部とも理解度の高い受講者（単旋律聴音の理解度は２声聴音の結果とほぼ一致していた)。

（２）授業の進め方

Ａグループの授業を先に開始し、約30分後よりＢグループと合流させ続行する。その際、各聴音演習の課題は同問題とし、以下のような方法をとった。

①４声体和声聴音

ａ．Ａグループ・和声聴音の前に和音聴音を行い、

＊兵庫教育大学学校教育学部附属実技教育研究指導センター（音楽教育分野）

1学期の理解度の遅れを復習した。
・2声聴音として外声部のみの聴音を行った。

b．A＋Bグループ・4声体和声聴音として実施した。
この方法で、Aグループの受講者は、同問題をBグループの倍の回数聴く機会を与えられ、Bグループと合流した時点で、内声部の聴音に専念できる。また、この時点でも、Bassの理解度が低い場合は、Bassの聴音のみに専念させ、1学期と同様、外声部の聴音とした。

②2声聴音

a．Aグループ・単旋律聴音演習としてSop.のみの聴音とした。

b．A＋Bグループ・2声聴音として実施した。
この方法で、Aグループの受講者は、同問題をBグループの倍の回数聴く機会を与えられ、Bグループと合流した時点で、Bassの聴音に専念できる。また、この時点でもSop.の理解度が低い場合は、Sop.の聴音のみに専念させ、1学期と同様、単旋律聴音とした。

以上の方法により、2グループを同時限に進めていくことが可能である。さらに、Aグループ内の理解度の格差もカバーできることより、約3段階の理解度の受講者を一度に進められることが可能である。

Ⅲ、2学期「ソルフェージュ」の教育内容

小論（注1）で述べた、各時限の教育内容編成に従って、Ⅱで計画した同時限内時間差授業の方法で実施した演習項目を示していく（問題譜例を参照のこと）。

なお、第1週は1学期末試験の説明と第2学期のガイダンスを行い、第2週から授業を開始した。

1）和声法

4声体和声聴音の理解度を見ながら、徐々に和音記号・和音機能・和声進行等の説明を行い、4声体和声聴音の理論的理解と3学期の弾き歌い演習の準備とした。

2）聴音

各問題は、10点満点として、0点・0～5点未満・5点以上～10点未満・10点の4段階に受講者を評価した。結果は、正解率で割り出した。いずれもピアノ演奏によって実施した。

（1）4声体和声聴音（譜例1参照）

Aグループは、開始音（Sop.とBass）をあたえてから行い、書取る声部を強めに奏した（約10回）。

A＋Bグループでは、「内声部の開始音のみ与え、書取る声部は強めに奏し、理解度に応じて均一な音量で奏した（10回）。

問題作成にあたっては、その週の理解度に応じて、次週の難易度を決定した。

〈結果〉

①Sop.の理解度：全ての問題において、正解率半分以上の受講者は、7割5分以上となった。理解度はかなり高い。

（表1－a）

譜例1	解答人数				欠席者数
Sop.	0点	0点~5点未満	5点以上 10点未満	10点	
（1）	1	1	4	9	1
（2）	0	0	4	11	1
（3）	0	0	2	10	4
（4）	1	1	2	8	4
（5）	1	3	5	7	0

（表中の番号は、譜例中の問題番号の回答結果を示す。）

②Bassの理解度：第6週より借用和音が加わった。その第6週の問題では、Ter.の動きが少な

（表1－b）

譜例1	解答人数				欠席者数
Bass	0点	0点~5点未満	5点以上 10点未満	10点	
（1）	1	2	2	10	1
（2）	2	0	5	8	1
（3）	0	2	3	7	4
（4）	4	3	2	3	4
（5）	0	4	6	6	0

いため、比較的理解度は高いが、第7週の問題では、Ter.が順次下行進行しているため、とくに、2小節2拍目のcis音を境に、理解度が低下している。しかし、その他は、Sop.の理解度とほぼ同じ結果を得られた。

③Alt.の理解度：第2週の問題では、容易に聴取れるように各声部間の音程の巾を広くした開離問題を行ったが、困難なようであった。そのため、第4週の問題からは、かなり強めに奏した。問題によりバラツキがあるが、複旋律の聴分け能力は進んでいるように思える。

（表1－c）

譜例1	解答人数				欠席者数
Alt.	0点	0点~5点構	5点以上 10点構	10点	
(1)	8	3	2	10	1
(2)	1	0	9	2	1
(3)	0	3	3	5	4
(4)	4	3	1	6	4
(5)	0	2	9	4	0

④Ter.の理解度：各声部を通じ、聴取りの理解度はもっとも低い。とくに、第4週の問題の1小節目では、Bassとオクターブ音程のため聴取困難で正解者は少ない。また、全問を通して、Sop.と混同して聴取っている受講者が目立った。

（表1－d）

譜例1	解答人数				欠席者数
Ter.	0点	0点~5点構	5点以上 10点構	10点	
(1)	8	2	3	2	1
(2)	10	2	0	3	1
(3)	3	3	0	6	4
(4)	4	3	2	3	4
(5)	3	5	3	5	0

⑤外声部・4声部の理解度：4声部全体としての結果は、外声部の結果に大きく左右されてしまうが、複旋律の聴分け能力は、かなり進んできたと言えよう。

（表1－e）

譜例1	解答人数				欠席者数
外声部	0点	0点~5点構	5点以上 10点構	10点	
(1)	2	1	5	7	1
(2)	1	2	3	9	1
(3)	0	2	5	5	4
(4)	1	4	3	4	4
(5)	2	6	5	3	0

（表1－f）

譜例1	解答人数				欠席者数	通奏回数
4声部	0点	0点~5点構	5点以上 10点構	10点		
(1)	2	4	7	2	1	10
(2)	1	4	7	3	1	10
(3)	0	4	3	5	4	10
(4)	1	5	4	2	4	10
(5)	2	7	4	2	0	10

（2）2声聴音（譜例2参照）

Aグループは開始音を与え、Sop.のみを奏し、単旋律聴音として実施した（約8回）。

A＋Bグループでは、Aグループのみ先にBassの開始音を与えておいてから行った。書取る声部は強めに奏し、理解度に応じて、均一な音量で奏した。（7～10回）。

問題作成にあたっては、その週の理解度に応じて、次週の難易度を決定した。

〈結果〉

①Sop.の理解度：第6週の問題では、リズムの難易度が高かったため受講者の理解度は少し低いが、その他の問題ではかなり高い。

(表2－a)

譜例2	解答人数				欠席者数
Sop.	0点	0点~5点構	5点以上 10点構	10点	
(1)	1	3	3	8	1
(2)	4	0	5	7	0
(3)	0	0	2	13	1
(4)	3	3	2	4	4
(5)	0	2	7	7	0

②Bassの理解度：1小節に1音のBassを与え、徐々に2拍に対し1音、また1拍に対し1音というように難易度を上げて行った。

第6週の問題では借用和音も加え、4小節3拍目ではBassのみが動いていることより理解度は低いが、その他の問題では正解率が半分以上の受講者は約7割となった。

(表2－b)

譜例2	解答人数				欠席者数
Bass	0点	0点~5点構	5点以上 10点構	10点	
(1)	2	5	2	6	1
(2)	6	0	4	7	0
(3)	1	2	6	6	1
(4)	5	2	1	4	4
(5)	0	3	6	7	0

③2声部の理解度：2声部全体としての結果はBassの結果に影響されるが、かなりの理解度が得られたと言えよう。

また、歌唱教材自体の認識は低かった。

(表2－c)

譜例2	解答人数				欠席者数	通奏回数
2声部	0点	0点~5点構	5点以上 10点構	10点		
(1)	1	4	5	5	1	7
(2)	4	2	4	6	0	8
(3)	1	3	5	6	1	8
(4)	5	3	1	3	4	10
(5)	0	4	6	6	0	8

Ⅳ．第2学期末聴音試験

Ⅲの授業結果を基に、応用的な試験問題を創作した(譜例3参照)。

なお、試験項目は、4声体和声聴音・2声聴音および和声進行に関する理論問題の3項目行ったが、ここでは、聴音問題の結果のみを示す。

1）試験結果

試験結果は表のとおりで、試験方法も評定方法も前述同様とする（表3参照）。

（1）4声体和声聴音

問題がハ長調とはいえ、Bass進行は跳躍等も含み難解にもかかわらず、外声部は授業における結果もしくはそれ以上の理解度が得られている。しかし、内声部の結果は5割以上の受講者が0点で、内声部聴取能力の理解度はまだまだ低いと言えよう。

（2）2声聴音

問題は、歌唱教材を用いず創作し、またBass進行もSop.1音に対しBass1音という箇所を増加させたにもかかわらず、授業とほぼ同理解度が得られた。よって、2声部の聴取能力は大いに向上したと言えよう。

2）1学期試験と2学末期試験結果の比較

各項目の試験結果の比較表は、以下のとおりである。ここでは、各項目の個々の結果は省略する。

（表3）

譜例3		解答人数				欠席者数	通奏回数
		0点	0点~5点未満	5点以上10点未満	10点		
(1)	sop.	0	1	3	12	0	−
	Bass	3	3	1	9	0	−
	Alt.	8	2	6	0	0	−
	Ter.	12	0	3	1	0	−
	外声部	1	0	7	8	0	−
	4声部	1	6	7	2	0	10
(2)	Sop.	2	3	3	8	0	−
	Bass	2	4	4	6	0	−
	2声部	2	3	4	7	0	10

（表4）

4声体和声聴音		解答人数			
		0点	0点~5点未満	5点以上10点未満	10点
1入学時聴能力試験（4月）		2	6	4	4
1学期末試験（7月）		0	3	5	8
2学期末試験(12月)	外声部のみ	1	0	7	8
	4声体	1	6	7	2

（1）4声体和声聴音（表4参照）

入学時と比較すると、問題の難易度もかなり上がったにもかかわらず、2学期間を終えて、当時の外声部のみの結果よりも4声部全体の結果のほうがより理解度が高まっている。よって、複声部の聴取能力は向上している。しかし、1学期末の結果と比較すると、外声部の聴取能力は向上しているものの、4声部の理解度は2学期間を費やしても思うように得られなかったのが現状である。

（2）2声聴音

入学時には、単旋律聴音の理解度ですら正解率半分以上の受講者は4割強程度であったが、2学期末にはかなり難易度の高い2声部の聴取にもかかわらず、約7割に理解度は高まっている。さらに、満点を取った受講者も7名と全体の4割強を占めている。よって2声聴音の聴取能力は、順調に高まったと判断できる。

（表5）

2声聴音	解答人数			
	0点	0点~5点未満	5点以上10点未満	10点
1入学時聴能力試験（4月）（単旋律聴音）	5	4	5	2
1学期末試験（7月）	3	7	2	4
2学期末試験（12月）	2	3	4	7

3）まとめ

2学期においても、小論（注1）の「各時限の教育内容編成」どおり、もしくはそれ以上のペースで授業を進めることができた。

また、同時限内時間差授業もスムーズに進められ効果的であったといえる。

しかしながら、入学以前にソルフェージュ教育を受けた経験のある受講者、また、長年ピアノ実技学習を続けてきた受講者といずれも未経験の受講者の理解度の差は、2学期間を通しても縮めることは困難であった。

おわりに

初等教員養成課程におけるソルフェージュ教育の目的を考えたとき、けっして高度な聴音能力等を身につけるのではなく、あくまで音楽を学ぶための手段であるべきであると述べてきた。ここでは、実際に時限内に行った和声法・編曲法・発声法については記してはいないが、そのような意味において、聴音演習で培った能力が編曲法等における基礎的知識や基本的な和声感覚に役立ってきていることはいうまでもない。したがって、目的は果たしつつあるといえよう。

次回は、上記のような試論を踏まえ、いよいよ第3学期の「弾き歌い」演習の導入について、引き続き研究していくものである。

注

1．拙稿「初等教員養成課程におけるソルフェージュ教育のあり方について」『実技教育研究』第10号、兵庫教育大学学校教育学部付属実技教育研究指導センター、1996年

2．拙稿「初等教員養成課程における授業科目ソルフェージュの教育内容編成について（1）」『実技教育研究』第11号、兵庫教育大学学校教育学部付属実技教育研究指導センター、1997年

参 考 文 献

論文

1．永富正之著「ソルフェージュ教育概説」『東京芸術大学音楽学部年誌』第1集、東京芸術大学、1974年

2．三好啓士著「音楽理論教育に関する研究（Ⅳ）」『広島大学教育学部紀要』第2部第34号、広島大学教育学部、1985年

3．三好啓士著「ソルフェージュ教育に関する一考察」『広島大学教育学部紀要』第2部第35号、広島大学教育学部、1986年

4．五味克久著「ソルフェージュ研究（その1）『神戸大学教育学部紀要』第80集、神戸大学教育学部、1988年

5．五味克久著「ソルフェージュ研究（その2）『神戸大学教育学部紀要』第81集、神戸大学教育学部、1988年

6．五味克久著「ソルフェージュ研究（その3）『神戸大学教育学部紀要』第83集、神戸大学教育学部、1989年

7．河口眞朱美著「ソルフェージュの教育的意義について」『季刊音楽教育研究』音楽之友社、1993年冬号

8．大月玄之他共著「教員養成大学音楽専攻学生の音楽学習歴と書取能力との相関」『三重大学教育学部研究紀要』第45巻、教育科学、1994年

9．松中久儀・土屋公平共著「教員養成課程における伴奏付けの指導法」『金沢大学教育部紀要』第44号、1995年

著書・テキスト

10. 安川加寿子著『ソルフェージュ』音楽之友社、1953年

11. 石桁真礼生他共著『楽典・理論と実習』音楽之友社、1965年

12. 小山章三著『ソルフェージュ・視唱のための30課』音楽之友社、1970年

13. 山縣茂太郎著『これからはじめる和音聴音』音楽之友社、1972年

14. M．ビッチュ・J．P．オルスタイン共著、池内友次郎訳『音楽覚え書き帖』音楽之友社、1979年

15. 伊藤征夫著『やさしい視唱のレッスン・ピアノ伴奏付Ⅰ』音楽之友社、1991年

16. 伊藤征夫著『やさしい視唱のレッスン・ピアノ伴奏付Ⅱ』音楽之友社、1991年

17. 林原幾久他共著『総合ソルフェージュⅠ基礎』音楽之友社、1991年

18. 池内友次郎・長谷川良夫・石桁真礼生他共著『和声・理論と実習Ⅰ』音楽之友社、1964年

19. 池内友次郎・長谷川良夫・石桁真礼生他共著『和声・理論と実習Ⅱ』音楽之友社、1965年

20. 池内友次郎・長谷川良夫・石桁真礼生他共著『和声・理論と実習Ⅲ』音楽之友社、1966年

21. 長谷川良夫著『対位法』音楽之友社、1965年

譜例 1

（第２週）

（1）

a: I　V⁶₄　I₆　V₇　VI　IV　I⁶₄　V₇　I

T　D　T　D　T　S　D　T

（第４週）

（2）

C: I　IV⁶₄　I　I₆　V₇　VI　V　I　III　IV　II₆　I⁶₄　V₇　I

T　S　T　D　T　D　T　S　D　T

（第６週）

（3）

C: I　V⁶₄　I₆　V⁴₃　IV　V⁶₅　I⁶₄　V₇　I

T　D　T　S　D　T

（第７週）

（4）

a: I　V⁶₄　I₆　V⁴₃　IV　N₆　I⁶₄　V₇　I

T　D　T　S　D　T

（第８週）

（5）

D: I　V⁶₄　I₆　V⁴₃　IV　V⁶₅　I⁶₄　V₇　I

T　D　T　S　D　T

譜例 2

（第２週）

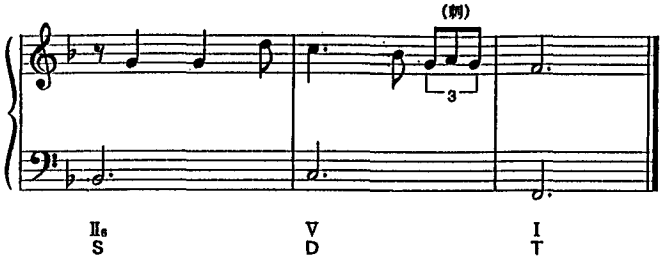
♩=76　「今日の日はさようなら」を基に

（1）

(経)　(経)

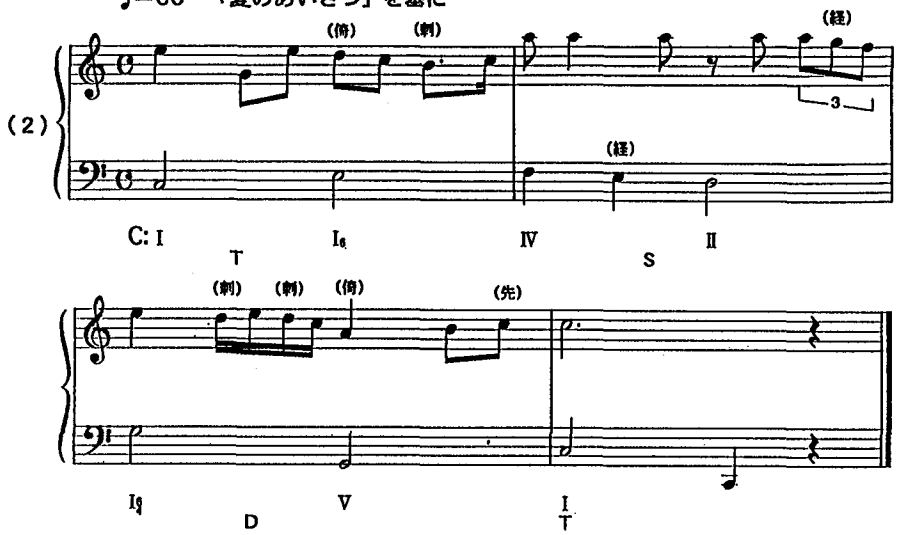
F: I　IV　I₆　VI

T　S　T　T



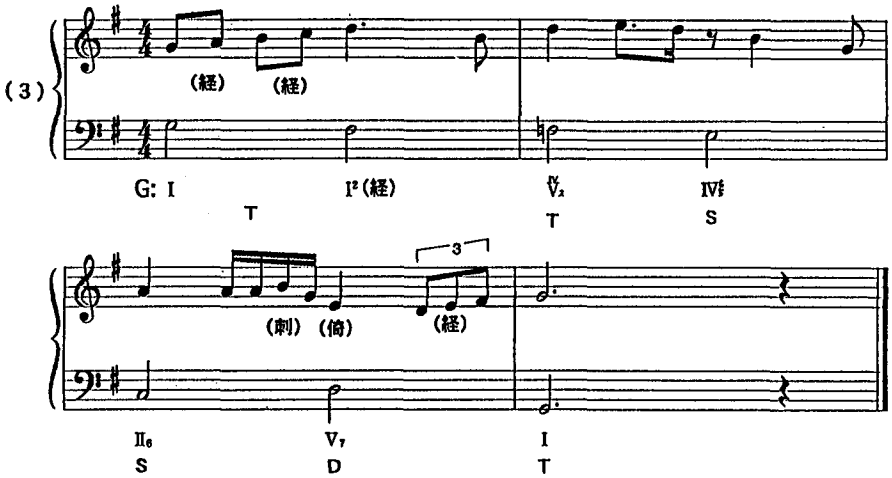
(第3週)

♩=60　「愛のあいさつ」を基に



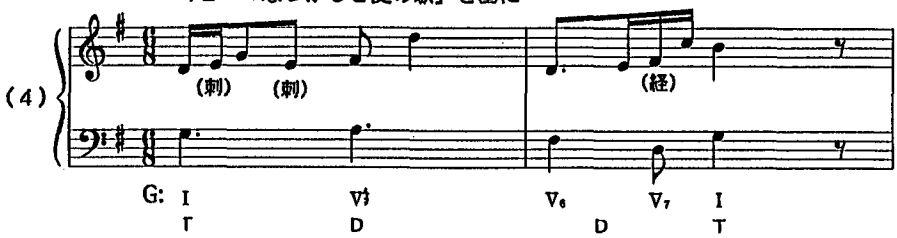
(第5週)

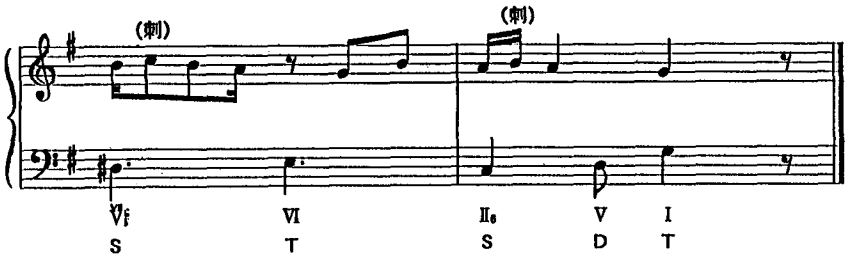
♩=60　「七つの子」を基に



(第6週)

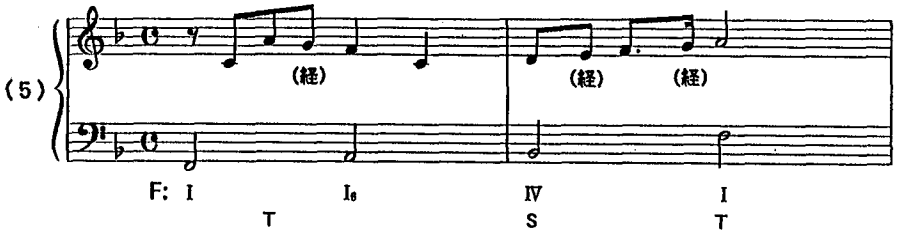
♪=72　「なつかしき愛の歌」を基に

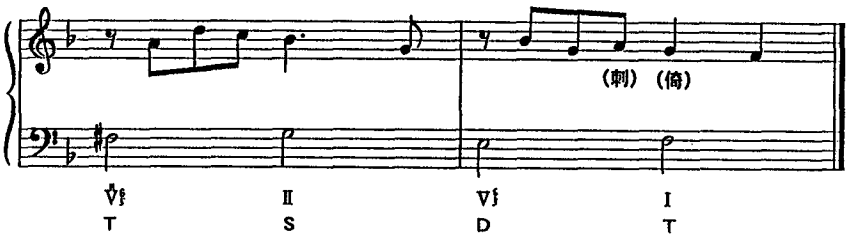




(第８週)

♩=60　「さようなら　みなさま」を基に

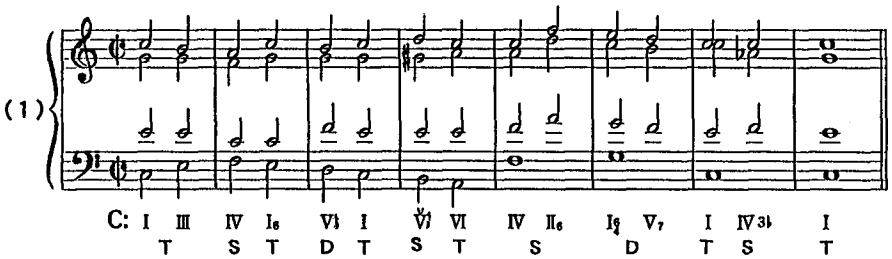




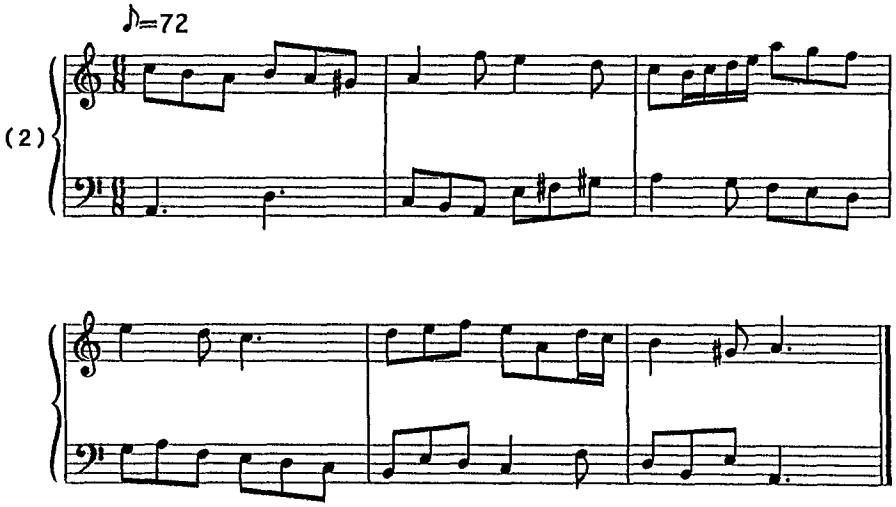
２学期末試験

譜例３

(第９週)



♪=72



A Solfeggio-Training Program Implemented with Special Emphasis on the Transcription of Musical Notes

Mayumi Niiyama

Department of Music Educatinon, The Center For Practical Educatinon
Hyogo University of Teacher Educatinon

This paper discusses introduction of the homogeneous-grouping program for students of solfeggio in the elementary education course who differ in their knowledge of music. In this program, the transcription of music notes emphasizes harmony and arrangement to improve their performance of singing to piano accompaniment,